



南米[アルゼンチン]

1 農・畜産業の概況

アルゼンチン政府の農牧センサス（2018年）によると、農業経営体25万戸の所有面積は1億5500万ヘクタールであり、このうち4650万ヘクタールが農地、1億850万ヘクタールが牧草地として利用されている。中でもブエノスアイレス州、コルドバ州、サンタフェ州を中心とするパンパ地域は、平たんかつ肥沃な土壌であることに加え、気候も穏やかで降雨にも恵まれており、農畜産物の主産地となっている（図1）。

アルゼンチン国内産業に占める農畜産業の割合は、国内総生産（GDP）の6～7％程度であるが、農畜産物輸出額は全輸出額の6～7割を占めており、同国にとって農畜産業は外貨獲得上、極めて重要な産業となっている。

図1 アルゼンチンの行政区分



資料：機構作成

注：黄色の州はパンパ地域の中で農畜産物の主産地。

政策面を見ると、19年12月に発足したアルベルト・フェルナンデス政権は、改革・開放路線の政権運営を行った前政権から一転し、以前の国内優先主義に基づく輸出規制政策を実施した。アルゼンチンでは、18年前半に50年に1度といわれる干ばつの発生から農業生産が大幅に落ち込むとともに、自国通貨の急落など経済が低迷した。フェルナンデス政権発足後の20年は、経済が十分に回復しない中、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大から政権はその対応に追われた。21年には、インフレ対策などさまざまな経済対策の法案が提出されたが、11月に行われた国会議員中間選挙で上・下院とも与党連合が過半数割れとなり厳しい政権運営になった。22年後半からは、対ドル為替レートの下落、干ばつによる主要作物の収穫減や生産コスト上昇、外貨不足による輸入規制の強化などにより、厳しいインフレに見舞われ、景気悪化が進んだ。

アルゼンチン国家統計局（INDEC）によると、22年の実質GDP成長率は年後半から減速し、前年比5.2%増となった（図2）。同国では、18年からの景気の低迷に加え、20年はコロナ禍での厳しい行動制限措置による経済活動の停滞がさらなる景気の悪化を招いたことから、実質GDP成長率は3年連続でマイナス成長となった。21年は、COVID-19の拡大による経済停滞の反動でプラス成長に転じた。

図2 実質GDP成長率



資料：INDEC

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

アルゼンチンの酪農は、放牧を主体としてパンパ地域に集中している。主な生乳生産州は、生乳生産量の4割弱を占めるサンタフェ州、次いでコルドバ州（同3割程度）、ブエノスアイレス州（同2～3割程度）である。乳牛の主要品種はホルスタイン種が多く、全飼養頭数の9割以上を占めるとされる。

近年では、放牧に加えてトウモロコシなどの飼料穀物を補助的に給与する飼養形態が一般的となっている。一般的に小規模酪農家ほど放牧の割合が高く、規模が大きくなるにしたがって飼料穀物給与の比率が高くなる。

① 生乳の生産動向

アルゼンチン経済省によると、2022年の生乳生産量は、1155万7000キロリットル（前年比100.0%増）と前年並みとなった（表1）。近年の生乳生産量を見ると、20～21年は比較的乳牛の飼養に適した天候に恵まれたことや海外からの堅調な乳製品需要を背景として生産者の増産意欲が高まった。このため、21年の生乳生産量は、これまでの最大であった15年（1206万1000キロリットル）に次ぐ大きさとなった。

同国の生乳生産は、春の10月に最も生産量が多くなり、夏場の2～4月にかけて落ち込む傾向にある。22年の生乳生産量は、6月以降、干ばつや生産コスト高、低迷する経済動向などを反映し、生乳生産量が前年同月を下回る状況となった。（図3）。

表1 牛乳・乳製品の需給

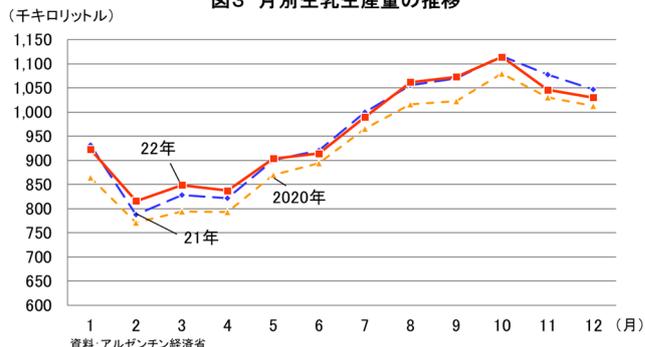
（単位：千キロリットル）

区分	2018	2019	2020	2021	2022
生乳生産量	10,527	10,343	11,113	11,553	11,557
輸出量	2,322	2,132	2,810	2,833	2,945
輸入量	63	85	48	71	75
消費量	8,436	8,194	8,394	8,634	8,684

資料：アルゼンチン経済省

注：数値は生乳換算。

図3 月別生乳生産量の推移



② 牛乳・乳製品の需給動向

2022年の牛乳・乳製品の消費量は、868万4000キロリットル（前年比0.6%増）と前年をわずかに上回った（表1）。

アルゼンチンは、全粉乳の輸出量でニュージーランド、EUに次ぐ世界第3位に位置するなど乳製品の主要輸出国の一つであり、ホエイやチーズの輸出も盛んである。INDECによると、22年の主要乳製品の輸出量は、25万4000トン（同2.9%増、製品重量ベース）と前年をわずかに上回った（表2）。品目別で見ると、全粉乳（同3.5%増）およびチーズ（同8.7%増）が増加する一方、ホエイ（同5.5%減）およびバター（同27.1%減）が減少した。全粉乳およびチーズは3年連続で増加し、直近5年間で最大の輸出量となった。最大の輸出品目である全粉乳は、アルジェリアとブラジルが主要な輸出先であり、両国を合わせると全体の9割以上を占める。

表2 主要乳製品輸出量の推移

（単位：千トン）

区分	2018	2019	2020	2021	2022
全粉乳	119	85	126	128	133
チーズ	43	39	45	52	57
ホエイ	46	42	33	40	38
脱脂粉乳	16	14	14	11	16
バター	3	7	13	15	10
合計	227	187	231	247	254

資料：INDEC

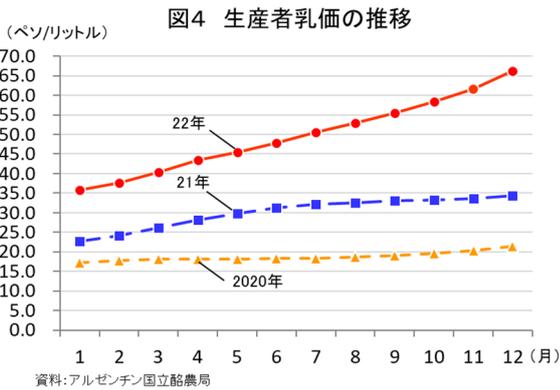
注：製品重量ベース。

③ 牛乳・乳製品の価格動向

2022年の生産者乳価（乳業が生産者に支払う生乳

1リットル当たりの価格)の平均は、49.65ペソ(前年比64.9%高)と前年を大幅に上回った。これは、同国で急激なインフレが進行したためであり、同年の消費者物価上昇率は21年を上回る94.8%となった(図4)。

同国政府は、急激な物価上昇に対応し、国内での物資の安定供給を図るため価格統制政策を講じてきたが、インフレの抑制には至らなかった。また、政府は22年10月、食品などのせ生活必需品の価格を90日間据え置く制度「プレシオス・フストス」の導入を公表した。



(2) 肉牛・牛肉産業

アルゼンチンの肉牛生産は、ブエノスアイレス州、サンタフェ州、コルドバ州など肥沃なパンパ地域を中心に、ヨーロッパ系の温帯種であるアンガスを主体とし、ヘレフォードやその交雑種による放牧肥育が一般的である。

口蹄疫ワクチン非接種清浄地域のステータスに関し国際獣疫事務局(WOAH)により、これまで南パタゴニア地域と呼ばれるチュブート州、サンタクルス州、ティエラ・デル・フェゴ州に加え、北パタゴニアB地域と呼ばれるリオネグロ州とネウケン州の一部、さらには北パタゴニアA地域と呼ばれるリオネグロ州、ネウケン州、ブエノスアイレス州の一部が認定を受けている。また、残りの地域はすべてワクチン接種清浄地域となっている(24年6月時点)。18年6月には、口蹄疫ワクチン非接種清浄地域から日本向けの牛肉輸出が解禁されている(図5)。

BSEについては、WOAHより「無視できるリスク」と評価されている(24年6月時点)。

図5 口蹄疫ステータス(2024年6月時点)



①牛の飼養動向

国家動植物衛生機構(SENASA)によると、2022年(12月末)の牛飼養頭数(乳用種を含む)は5424万3000頭(前年比1.5%増)と前年よりわずかに増加した(図6)。これは、為替レートが不安定な中、肉用牛生産者による牛の留保傾向が強まったためである。このほか、牛の繁殖効率の向上も頭数増の一因とされ、その結果、子牛の飼養頭数は02年以降最多となった。近年の牛飼養頭数の状況を見ると、国内の景気後退や中国からの需要などを背景に18年からは減少傾向となった。

州別では、ブエノスアイレス州が1973万8000頭(全体の36.4%)と最大で、サンタフェ州(11.3%)、コルドバ州(8.3%)の上位3州で国内飼養頭数全体の6割弱を占めている(図7)。

図6 牛飼養頭数の推移

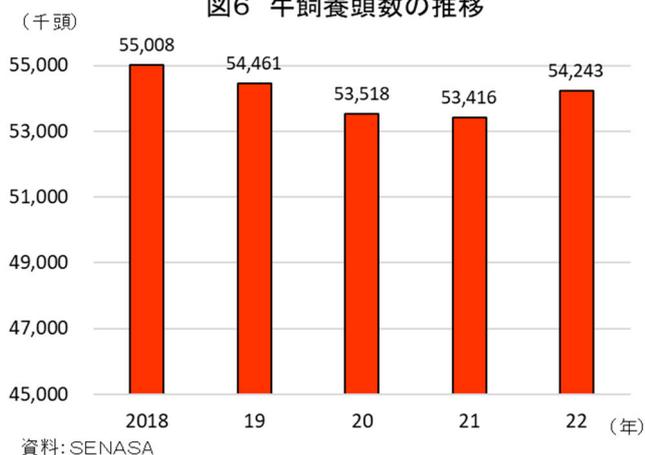
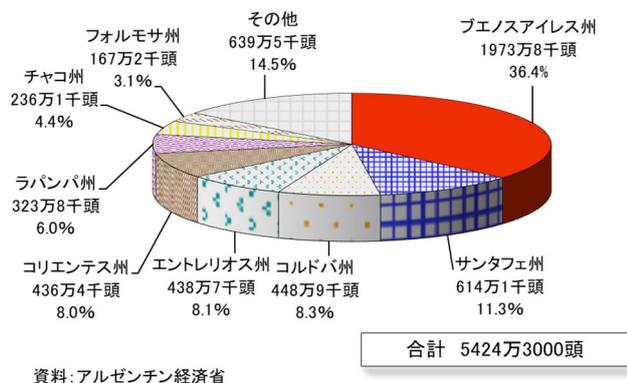


図7 牛の州別飼養頭数(2022年)



② 牛肉の需給動向

ア 生産

アルゼンチン経済省によると、2022年のと畜頭数は1358万頭（前年比4.6%増）、牛肉生産量（枝肉重量ベース）は315万1000トン（同5.7%増）となり、5年ぶりに減少した21年から再び上昇に転じた（表3）。これは、飼料費の高騰など生産コストの上昇、牛肉の輸出規制の実施、インフレに伴う消費者の購買力の低下といった状況がある一方で、中国を中心とした堅調な海外需要や高水準の肉牛価格により肉牛生産者の生産意欲が高まったためである。

表3 牛肉需給の推移

区分	2018	2019	2020	2021	2022
牛と畜頭数(千頭)	13,453	13,873	14,008	12,987	13,580
生産量(千トン)	3,054	3,124	3,171	2,982	3,151
輸出量(千トン)	562	844	885	726	803
輸出金額(百万米ドル)	1,982	3,105	2,699	2,644	3,290
1人当たり消費量(kg/人/年)	56.5	51.2	50.7	49.4	50.9
去勢牛生体価格(ペソ/kg)	37.8	64.4	98.1	177.0	273.5

資料: アルゼンチン経済省
注: 生産量、輸出量、1人当たり消費量は、枝肉重量ベース。

イ 輸出

INDECによると、2022年の牛肉輸出量（製品重量ベース）は、62万2188トン（前年比11.1%増）と前年の落ち込みからかなり大きく増加した。また輸出価格が上昇（同11.7%高）した結果、輸出額は同24.1%増と前年を大幅に上回った（表4）。輸出量の増加は、高値にある国内牛肉価格を抑制し国内消費を回復させるため、アルゼンチン政府が21年5月から30日間、牛肉の輸出停止をした反動とみられている。その後、牛肉輸出は再開されたが、一部品目については引き続き輸出禁止措置が継続された（23年末まで延長）。

輸出先別に見ると、全体の79%を占める中国向けは49万632トン（同15.6%増）と前年をかなり大きく上回った。COVID-19による移動制限や景気の後退があるものの、低価格の経産牛由来の冷凍フルセットのほか、去勢牛・未經産牛由来の前四分体、経産牛由来のその他の牛肉を中心に冷蔵・冷凍で輸出された。また、イスラエル向け（同2.3%増）、ドイツ向け（同9.4%増）も前年を上回った。一方、チリ向けは2万2974トン（同30.6%減）と前年を大幅に下回った。これは、同国向けは通常、若齢の去勢牛や未經産牛由来の冷蔵フルセットの輸出が中心となるが、パラグアイをはじめとした近隣国との競合が強まったためとみられる。

表4 牛肉輸出量および輸出額

区分	2022年			前年同期比(増減率)		
	輸出量(トン)	輸出額(千米ドル)	単価(米ドル/トン)	輸出量	輸出額	単価
中国	490,632	2,265,242	4,617	15.6%	34.7%	16.5%
イスラエル	31,418	236,100	7,515	2.3%	12.8%	14.6%
ドイツ	23,973	257,712	10,750	9.4%	12.1%	57.7%
チリ	22,974	171,186	7,451	▲30.6%	▲21.1%	▲29.0%
米国	20,848	129,014	6,188	▲1.3%	0.6%	1.9%
オランダ	16,950	168,043	9,914	40.9%	37.3%	▲2.6%
ブラジル	6,160	66,970	10,872	▲18.8%	9.2%	34.4%
イタリア	4,008	45,163	11,268	0.4%	6.0%	5.6%
スペイン	1,239	13,276	10,715	17.1%	20.0%	179.1%
その他	3,986	38,108	9,560	22.2%	14.7%	▲6.2%
合計	622,188	3,390,812	5,450	11.1%	24.1%	11.7%

資料: INDEC
注1: HSコード0201(冷蔵牛肉)、0202(冷凍牛肉)の合計。
注2: 輸出量は製品重量ベース。
注3: 出典が異なるため、表3と数値は異なる。

EU向けは、アルゼンチンに対してヒルトン枠（一定基準を満たす骨なし高級牛肉に対するEUの関税割当制度、対象年度は7月1日～翌年6月30日）が割り振られている。2022/23年度のアルゼンチンへの年間割当数量は、ヒルトン枠全体（6万6826トン）のうち2万9500トン（英国向けの1111トンを含む）と

最大数量が割り当てられている。このほか、21/22年度のEUのホルモンフリー牛肉（肥育ホルモン剤を投与しない牛由来の牛肉）の輸入に関する無関税割当枠（481枠）1万9600トンのうち、アルゼンチンの輸出数量は7536トンとウルグアイに次ぐ数量となった。なお、同枠は20年から米国が切り離されるとともに、26年までに1万トンまで段階的に削減されることとなった。

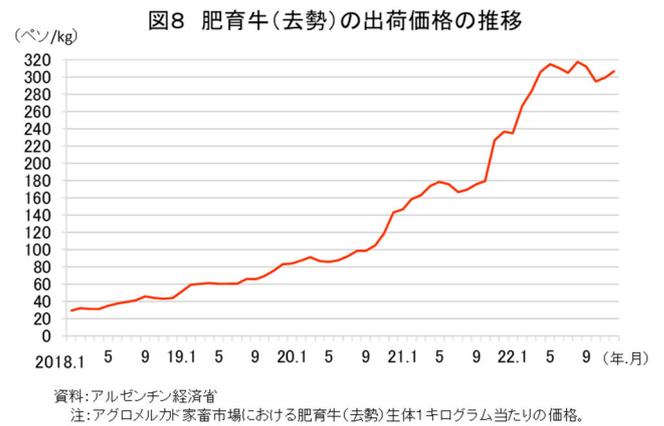
ウ 消費

2022年の1人当たり年間牛肉消費量は、50.9キログラム（前年比3.1%増）と前年よりやや増加した（表3）。近年の同国の1人当たり年間牛肉消費量は、インフレの進行や経済状況が低迷する中、より安価な鶏肉や豚肉に消費者の志向がシフトすることにより減少傾向で推移している。世界的に見ると、同国の1人当たり年間牛肉消費量は最高水準であるが、18年の56.5キログラムと比較して9.9%減少した。

② 価格動向

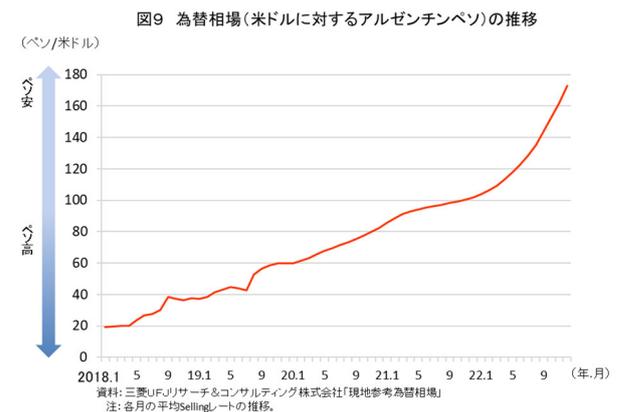
主要な家畜市場であるアグロメルカド家畜市場の20

22年の肥育牛（去勢）出荷価格は、海外からの堅調な牛肉需要、飼料費の高騰など生産コスト上昇や急激なインフレの進行などによりペソ建てで見ると21年に続き大幅に上昇した。22年12月の取引価格は、生体1キログラム当たり306.22ペソ（前年同月比29.3%高）となった（図8）。近年の状況を見ると、肥育牛（去勢）出荷価格は上昇傾向で推移しており、21年5月には牛肉輸出規制により一時的に下落したものの、その後再び上昇し、22年4月以降は同280ペソ超の高値を維持している。



3 飼料穀物の動向

米国農務省（USDA）によると、2022/23年度のアルゼンチンのトウモロコシ生産量は、世界の生産量の3.2%を占めた。牛肉生産は放牧が主体であることから、トウモロコシの国内消費は生産量の3割程度と少ない。また、トウモロコシ輸出量の世界貿易量に占める割合は、22/23年度（3月～翌2月）は14.0%となり、米国、ブラジル、ウクライナに次ぐ世界第4位トウモロコシ輸出国である。同国のトウモロコシ輸出は17年以降、為替相場が米ドルに対して急速なペソ安が進行したことで価格優位性が増したことや、穀物の堅調な国際価格を背景に生産・輸出意欲が強いことが背景にあるとみられる（図9）。



一方、22/23年度の大豆生産量は、世界の生産量の6.1%を占めており、国際市場で一定の影響力を有している。22/23年度（10月～翌9月）の大豆輸出量は、世界貿易量の2.4%とわずかであるが、搾油後の大豆かすの輸出量はブラジルに抜かれたものの世界第2位である。トウモロコシと大豆は作付け時期が近いいため、それぞれの価格動向が作付面積に影響する。

① 政策 ～政権交代前後の変化～

アルゼンチンの輸出登録制度（ROE）は、国内への食料供給の安定と主要な食料品価格の上昇を抑制するため1976年に導入された制度である。この制度の下で、輸出限度数量や輸出許可書の有効期間などが定められていたが、2015年12月のマクリ政権発足後に廃止された。しかし、19年12月に発足したフェルナンデス政権は21年4月、穀物の輸出監視を強化するため、ROEに類似する新たな情報登録措置を導入した。

また、02年1月の通貨切り下げに伴う大幅な税収減を補完するため、通貨切り下げで恩恵を受ける主要輸出農畜産物に対し輸出課徴金（輸出税）制度が設けられた。15年12月に発足したマクリ政権は輸出志向型の政策を推進し、大豆など一部を除き輸出課徴金を撤廃したが、18年の経済状況の悪化によりその見直しを余儀なくされた。輸出規制強化など政策転換を打ち出したフェルナンデス政権は、トウモロコシや大豆などの輸出課徴金の税率を引き上げた。このほか、大豆の輸出拡大を図り外貨収入を増やすため、大豆の輸出に当たり公式為替レートより有利な為替レートを適用する輸出拡大プログラム（大豆ドル）を導入するなど、政府による市場介入の姿勢を強めた。

② 飼料穀物の需給動向

USDAによると、2022/23度のアルゼンチンのトウモロコシ生産量は3700万トン（前年度比25.3%減）、輸出量は2524万トン（同27.2%減）いずれも前年度より大幅に減少した。また、大豆の生産量は2500万トン（同43.1%減）と大幅に減少する一方、輸出量は419万トン（同46.5%増）と前年度の減少から大幅に回復した（表5）。

アルゼンチンではラニーニャ現象の影響により3年連続で水不足に見舞われている。特に22年は60年に一度とされる厳しさとなり、穀物生産に大きな影響を及ぼした。同国は世界有数の大豆かすや大豆油の輸出国であるが、搾油用の大豆が不足したため、ブラジルなど近隣諸国からの大豆の輸入が増加した。

表5 主要穀物生産量の推移

(単位:百万トン)

区分/年度	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23	
トウモロコシ	生産量	51.00	51.00	52.00	49.50	37.00
	輸入量	0.01	0.00	0.01	0.01	0.02
	消費量	13.80	13.50	9.50	10.10	10.00
	輸出量	36.00	36.25	40.94	34.69	25.24
	期末在庫	4.09	3.62	1.18	1.80	2.32
大豆	生産量	55.30	48.80	46.20	43.90	25.00
	輸入量	6.47	4.88	4.82	3.84	9.06
	消費量	48.15	45.92	40.16	38.83	36.57
	輸出量	8.15	10.00	5.20	2.86	4.19
	期末在庫	29.20	26.65	25.06	23.90	17.00

資料:USDA

注:年度はトウモロコシは3月～翌2月、大豆は10月～翌9月。

③ 価格動向

2022年の穀物生産者販売価格は、トウモロコシが1トン当たり3万2083.9ペソ（前年比68.5%高）、大豆が同5万6539.5ペソ（同76.0%高）と、いずれも前年より大幅に上昇した（表6）。近年の生産者販売価格は、南米の乾燥気候、中国の輸入需要の増加、北米の北部地域の高温乾燥気候などの影響により20年後半から急上昇した。このような状況に加え、22年はウクライナ情勢やインフレの進行などによりさらに価格が上昇した。

表6 主要穀物の生産者販売価格

(単位:ペソ/トン)

区分	2018	2019	2020	2021	2022
トウモロコシ	4,253.1	6,735.8	10,776.3	19,037.2	32,083.9
大豆	7,527.7	11,351.5	18,509.5	32,129.3	56,539.5

資料:アルゼンチン経済省